

## P1 イルカ骨多量出土後の真脇遺跡発掘調査

高田秀樹（能登町真脇遺跡縄文館）、<sup>○</sup>平口哲夫（金沢医科大学），  
真脇遺跡調査団

### **Research at Mawaki archaeological excavation site in Noto, Central Japan, post dolphin Bones Discovery**

Hideki Takada (Mawaki Jomon Museum, Noto Town), Tetsuo Hiraguchi (Kanazawa Medical University), and Mawaki Excavation Unit

真脇遺跡は縄文時代前期初～晩期末の集落遺跡である。1982・83年（第1・2次調査）の発掘調査で、縄文時代前期末～中期初の層を中心に多量のイルカ骨が出土した。そのほか、縄文土器をはじめとする多種多様な遺物が大量に出土し、縄文文化を研究する上で不可欠の重要遺跡と位置づけられ、1989年に国指定史跡、1991年に出土品219点が重要文化財となった。1996年から史跡指定地の公有化に併せて史跡整備計画を進め、1998年から発掘調査を再開、縄文時代の集落変遷や環境変化を明らかにするため地質調査と自然科学的分析も実施することとなった。

第3～6（1998～2001年）次調査は縄文時代中期の住居跡の拡がりを確認するために面積310m<sup>2</sup>の調査区を設定した。新たな住居跡は発見されなかつたが、ほぼ同時期（縄文時代中期前葉～中葉）の整地層が検出された。整地層は調査区全面に30～50cmの厚さがあり、多くの遺構群が発見されている。特に注目されるのが、調査区の西側において検出された、長径140～150cm、短径100～130cm、深さ35～50cmの楕円形の土坑4基である。内3基からは底板が出土し、そのうち1基では板上に人骨（成人男性）が残っていた。このような埋葬方法は類例がなく、「板敷き土壙墓」と名付けられた。周囲に同規模の土坑が検出されないことから、被葬者は当時のムラのリーダーである可能性が高い。

第7～9（2002～2004年）次調査では縄文時代晩期の環状木柱列を調査するために面積300m<sup>2</sup>の調査区を設定した。第1・2次調査時にその一部が発見されたことから、調査区外への拡がりが予想されていた。その範囲を全面的に調査した結果、直径5.3～7.4mの規模で、ほぼ同じ場所に6回立て替えていたことが確認された。

第10～12（2005～2007年）次調査は第1・2次調査で検出した縄文時代中期住居跡の規模と内容を明らかにするため、面積130m<sup>2</sup>の調査区を設定した。第4号住居跡は東西約5.7m、南北約6.6m、平面長方形をなし、床面が2枚検出された。第3号住居跡は直径約5.7mの平面円形で、中央に石囲炉がある。これら2棟の住居跡の床には粘土が貼られ、周囲との高低差が認められないことから、平地式住居と考えられている。特に第3号住居跡の炉跡は6回作り替えられており、その炉に伴う床面も確認されている。2008年はこの第3号住居跡の炉跡と床面の詳細な調査を実施する予定である。

## P2 富山県高岡市から産出した海生哺乳類化石

○長澤一雄（山形中央高校），葉室麻吹・水上輝夫・安田俊雄・中川賢勇・葉室俊和（富山県古生物研究会）

### **Fossil marine mammals from the Upper Pliocene strata in Takaoka City, Toyama Prefecture, central Japan**

Kazuo Nagasawa (Yamagata-chuo Senior High School), Masui Hamuro (Toyama Paleontological Research Club), Teruo Mizukami (ditto), Toshio Yasuda (ditto), Ken'yu Nakagawa (ditto), and Toshikazu Hamuro (ditto)

富山県高岡市五十辺の採土場周辺から、鯨類や海牛類など海生哺乳類化石が多数産出した。特に海牛類化石が多く産出した。化石産出層は、石灰質砂岩を主とする頭川層である。本層は北陸地域に分布する新第三系氷見層群の代表的な海成層であり、五十辺周辺の本層は、ほぼ上部鮮新統と考えられる。頭川層からは、従来から豊富な貝類化石が産出しており、上部鮮新統から更新統にかけて日本海地域で繁栄した大桑-万願寺動物群と報告してきた。今回、富山県古生物研究会の活動によって、断片骨ながら多数の海生哺乳類化石が採集されたので、その概要と意義について報告する。

調査にあたっては、藤井昭二先生（富山大学名誉教授）に助言をいただいた。山田皓也氏には、化石採集に便宜をはかっていただいた。

鯨類化石：小型歯鯨類の前頭部化石；吻基部から外鼻孔手前の部位で、前上頸間溝と内部を仕切る中篩骨が確認される。肋骨断片化石；大型で断面には海綿質が発達しており、明らかに鯨類である。平板状断片化石；全体に厚みがあり、部位不明ながら、大型鯨類の肩甲骨の可能性がある。五十辺からの鯨類化石の産出はまだ多くないものの、国内における鮮新/更新統の鯨類化石産地が限られることから、産地として重要であり、年代的に意義がある。今後の保存良好な化石の産出が期待される。

海牛類化石：頭蓋の鱗状骨類骨突起部化石；保存部位は限定されるが、形態的な特徴が比較的明瞭であり、他の化石種との比較によって詳しい議論ができると考えられる。上腕骨近位部化石；比較的大型の上腕骨で、球面の骨頭部が保存され、大結節が欠損する。骨体が鯨類と異なり、ねじれる特徴を示すことから海牛類と判断される。肋骨断片化石；多数の断片化石が産出している。断面が緻密な肋骨で典型的な海牛類の肋骨の特徴を示す。日本の海牛類の化石産地は20箇所知られているが、第四紀にかけては北海道地域に収斂する傾向がある。鮮新/更新世の化石は、ほとんどがステラーカイギュウ系統のヒドロダマリス属 *Hydrodamalis* であり、五十辺産化石も同属の可能性が大きい。最近、本州の日本海地域において、鮮新/更新世の化石産出が増加しつつある。それらは、山形県（戸沢村、庄内町）、新潟県（長岡市）、石川県（金沢市）などで、今回の化石の追加によって、本州の日本海沿岸には、鮮新/更新世に海牛が広く分布していた可能性が大きくなつた。

## P3 2007年度北海道沿岸のストランディングレコード

○松石隆・田口美緒子（ストランディングネットワーク北海道）

### Stranding records in Hokkaido fiscal 2007

Takashi Matsuishi and Mioko Taguchi (Stranding Network Hokkaido)

**【緒論】** ストランディングネットワーク北海道(SNH)では、2007年4月よりストランディング情報通報専用電話「北海道いるか・くじら 110番」を開設するなどして、積極的に北海道内のストランディング(座礁・漂着・混獲)情報を収集した。その結果、従来年間20~30件だった北海道沿岸のストランディング情報は、2007年度には61件に達したので、その内容を報告する。

**【方法】** ストランディング情報は、SNH会員からの通報の他、一般の方からは「北海道いるか・くじら 110番」、電子メールにて通報を受けた。また、ネズミイルカについては、函館市臼尻、石狩市浜益区、羅臼町の漁業者に依頼し、直接情報提供を受けた。SNHが受報したストランディング情報は逐次日本鯨類研究所に報告した。また、日本鯨類研究所が受報した北海道のストランディング情報のうち、SNHを経由しなかったものについては、日本鯨類研究所が公表したストランディングレコードより転記した。

**【結果】** 北海道沿岸のストランディング情報は、2007年度に64件を受報した。そのうち3件は、2006年度のストランディングに関する情報であった。日本鯨類研究所ストランディングレコードより転記したものは13であった。鯨種としては、ミンククジラ22件、ネズミイルカ17件、イシイルカ5件、オウギハクジラ5件、カマイルカ3件、種不明ネズミイルカ科鯨類3件、種不明鯨類2件、アカボウクジラ、オウギハクジラ属鯨類、オガワコマッコウ、コククジラ、ゴンドウ類、ハナゴンドウ、種不明イルカ各1件であった。64件のうち写真が入手できたものが38件、標本が採集できたものが48件(日鯨研に直接送付された物を含む)であった。

特筆すべきストランディングとして、まず2006年10月6日漂着2007年4月18日受報の湧別町登栄床におけるハナゴンドウの漂着があげられる。これはオホーツク海で最初の、ハナゴンドウのストランディング情報であった。また、2007年8月1日漂着受報の苫小牧市錦岡におけるコククジラのストランディングは、絶滅危惧種に指定されているアジア個体群の1個体であった。この個体については、水産庁から依頼を受けた石川創氏(日鯨研)の指揮下にてSNHが調査を行い、標本を収集した。

2008年度は、「北海道いるか・くじら 110番」を釣り人等にも広く周知するとともに、標本収集、外部形態測定体制を整え、より広く鯨類研究に寄与したい。

## P4 津軽海峡における鯨類の構成種と地理的・季節的分布について V～カマイルカの地理的分布と水温の関係～

○堀本高矩・金子拓未・山口鉄平・岡崎宏美・寺岡峻・東勝輝・大岡恵里・北山春菜・柴龍太郎（北海道大学鯨類研究会），松石隆（北海道大学）

### **Species composition and geographical / seasonal distribution of Cetacean in Tsugaru Strait, Japan V—The relation between sea surface temperature and geographical distribution of Pacific White-Sided Dolphins, *Lagenorhynchus obliquidens*—**

Takanori Horimoto (Hokkaido University Cetacean Research Group), Takumi Kaneko (ditto), Teppei Yamaguchi(ditto), Hiromi Okazaki(ditto), Shun Teraoka, Katsuteru Azuma(ditto), Eri Ooka(ditto), Haruna Kitayama(ditto), Ryutaro Shiba (ditto), and Takashi Matsuishi (Hokkaido University)

**【緒論】** 津軽海峡は日本海と太平洋を結ぶ唯一の海峡であり，日本海・太平洋間を回遊する鯨類の回遊時期や個体数を観測するのに最適な地点である。北海道大学鯨類研究会では2003年5月から現在まで鯨類目視調査を継続して行ってきた。本研究ではカマイルカの海峡内での地理的分布の推移を調べ、水温との関連性について考察した。

**【方法】** 函館・青森間を定期就航するフェリーの船上にて、日帰りで目視調査を実施した。調査は2003年5月から始め、現在も継続中であるが、本報告では2008年2月までの調査記録を用いて解析した。記録はIWCの鯨類目視調査SOWERの方法に準じた。津軽海峡の水温をNOAAの衛星情報から入手し、カマイルカの発見分布との関係について解析を行った。

**【結果・考察】** 前報までに、カマイルカの津軽海峡への来遊時期は3、4月であることがわかった。この時期津軽暖流主流域の水温は8～12°Cの範囲にあった。5月上旬から中旬にかけ、陸奥湾を除いた津軽海峡全域で14～17°Cまで上昇し、カマイルカは北部反流域および南部環流域において発見群数が増えた。5月中旬から下旬には、水温上昇が遅れていた陸奥湾でも14～18°Cまで上昇し、カマイルカは陸奥湾西部で発見された。6月に入ると、陸奥湾内の水温は18～20°Cまで上昇した。以降、陸奥湾内でのカマイルカの発見群数は減少し、15°C程度の南部還流域に発見が集中した。7月に入ると、カマイルカの発見群数は大幅に減った。この時、津軽海峡全体の水温は20～23°Cの範囲にあった。カマイルカの発見は津軽海峡内の水温が20°C以上になる7月から大幅に減少した。このことから、津軽海峡に来遊したカマイルカは海峡内の水温が20°Cを越えると海峡外へ移動すると考えられる。以上の結果から、津軽海峡に来遊するカマイルカは主に14～18°Cの水温帯に分布すると推測され、この水温帯の水塊の挙動が海峡内における分布を規定する要因であると考えられた。

## P5 新潟県沿岸・沖合における海生哺乳類の漂着・混獲・目撃

### 記録（2007年6月～2008年5月）

本間義治（新潟大学），<sup>○</sup>箕輪一博（柏崎博物館），中村幸弘（上越水族館），  
岩尾一（新潟水族館），青柳彰（寺泊水族館）

#### **Stranding, entangling and sighting records of marine mammals in coastal and offshore regions of Niigata Prefecture during the years, June 2007～May 2008**

Yoshiharu Honma (Niigata University), Kazuhiro Minowa (Kashiwazaki Museum),  
Yukihiro Nakamura (Johetsu Aquarium), Hajime Iwao (Niigata City Aquarium), and  
Akira Aoyagi (Teradomari Aquarium)

2007年6月から2008年5月の間に、新潟県沿岸・沖合における海生哺乳類の漂着・混獲・目撃等の記録を取り纏めた。漂着は7件で（ハナゴンドウ1件、オガワコマッコウ1件、ハンドウイルカ4件、キタオットセイ1件）であった。オガワコマッコウとキタオットセイは、新潟市水族館で一時的に保護したが死亡してしまった。ハンドウイルカの2頭については、人為的に尾鰭が切断されていた。毎年、カマイルカの漂着がみられたのに、今回は漂着がなく珍しい事例となった。なお、従来新潟では少なかったハンドウイルカの漂着が4件あり、日本海側のハンドウイルカを研究する好材料となった。この間における漂着数の少ない傾向は、隣県富山湾でも同様という情報があり、海況などの検討が必要である。

また、佐渡航路船のイルカ類を除いた本県の沿岸・沖合で目撃された鯨類の記録は28件（ツチクジラ？1件、ハナゴンドウ3件、カマイルカ24件、ゴマフアザラシ1件）であった。柏崎市のカマイルカ目撃情報はカタクチイワシの群泳時期、糸魚川市のカマイルカ目撃情報はホタルイカの産卵・接岸時期と重なっており、陸地付近まで来遊し採餌していたものと推察される。また、糸魚川市沿岸における大型鯨の目撃は、全長約10mであったとの情報に基づき、近年日本海で頻繁に確認されているツチクジラではないかと推定した。なお、この間における混獲の記録はなかった。

ところで、新潟県は北海道に次ぎ海岸距離が長いが、大学・水族館・博物館等が協力し合って海生哺乳類の目撃漂着記録を纏めている。近年は柏崎市のイルカウォッチング情報や、関心をもつ沿岸住民による情報が数多く寄せられるようになった。今後もこの体制を保ちつつ、情報の集約に努力したい。